

色川武大における変名作品の意義

——井上志摩夫「紙の月と描いた雲」を中心に——

木下 弦

一、はじめに

本稿では、色川武大における変名作品より、井上志摩夫名義作品の意義を考察することで、倶楽部雑誌というメディアの重要性を明らかにしたい。

色川は、本名「色川武大」名義のほか、複数の筆名を作風で使い分けた作家である。本名名義は「純文学」に、別名義は「エンターテイメント」に分類され、^①『昭和文学全集』（第三一巻、小学館、一九八八年十二月）には、色川武大名義作品のみが収録されている。しかし、個人全集『色川武大 阿佐田哲也全集』（全一六巻、福武書店、一九九一年一月～一九九三年二月、以下『全集』）の書名にも表れているように、「阿佐田哲也」という筆名は、色川武大という作家において、不可欠の要素となっている。

一九五〇年代から六〇年代に用いられた変名「井上志摩夫」名義

の作品は、『全集』にも未収録で、特に重要視されてこなかった。現在は、『井上志摩夫傑作時代小説集』（全五巻、双葉社、一九九七年一月～一九八八年七月、以下『傑作時代小説集』）と『色川武大・阿佐田哲也 電子全集』（全二三巻、小学館、二〇一九年四月～二一年二月、以下『電子全集』）に井上志摩夫名義作品の一部が収録されている。とはいえ、筆名の使用期間、発表媒体、作品点数など、その全貌は未詳である。

一九六一（昭和三六）年、第六回中央公論新人賞の受賞により、色川は文壇に登場する。同年の新聞記事「第六回中央公論新人賞をうけた 色川武大」（『朝日新聞』九月一四日朝刊、一〇面、「朝日新聞クロスサーチ」）によれば、「無名の作家である」という紹介からはじまり、「純文学」と断わったのは、実は匿名で、いろんな娯楽雑誌に大衆小説を書いているからである。現代物はむろん、時代物まで書いて、生計を立ててきた」とある。前述のような作家のイメージは、デビュー当初から形成されていたことを確認できるが、

本名名義の受賞作品「黒い布」(『中央公論』第七六年第一一〇号、一

九六一年十一月)が「純文学」と強調されたのは「匿名で、いろんな娯楽雑誌に大衆小説を書いている」経歴だったからこそで、デビューまでの習作期間という文脈に「大衆小説」が位置づけられていたことに注意したい。

一九六八年、阿佐田哲也名義の第一作「実録雀豪列伝」が、双葉社の雑誌『週刊大衆』に連載される。⁽²⁾その作品は、阿佐田哲也『牌の魔術師』(報知新聞社、一九六九年十二月)として早くから単行本化されているが、井上志摩夫名義作品の現存が明らかになったのは、作者の没後である。まずは研究の背景として、作者による言説を辿りたい。

色川は、本名名義の第一創作集『怪しい来客簿』(話の特集、一九七七年四月)出版以降、インタビュー記事「現代人劇場 麻雀の鬼・阿佐田哲也のもう一つの顔」(『週刊サンケイ』一四四九号、一九七七年十一月一七日)を端緒に、「井上志摩夫」について繰り返し語っている。『無職無宿虫の息』(講談社、一九八〇年七月)所収の「ふくちゃんれでい」⁽³⁾という小説において、語り手の「私」は、次のように述べる。

私はじめて懂がれた女性は、浅草の舞台に出ておりました井上喬恵という歌手ですが、浅草人さえ誰もおぼえていないでしょう。笑の王国という劇団におりましたが、目立たない存在でした。でも、私の最初の筆名は、この女性にあやかって井上

という名前になっております。

(『無職無宿虫の息』一二一―一二三頁)

引用箇所の「筆名」が「井上志摩夫」のことを指しているのかは、定かでない。しかし、「私がはじめて懂がれた女性」と「私の最初の筆名」とを結びつける「井上という名前」を語りはじめたことは、見逃せない。また、『明日泣く』(実業之日本社、一九八九年一月)所収の小説「岩見重太郎くん」⁽⁴⁾は、過去の創作活動と岩見重太郎の佛々退治とを交互に語る作品で、井上志摩夫に関する言説において注目されてきた。⁽⁵⁾

このような変名に関する記述は、小説に限らない。たとえば、『喰いたい放題』(潮出版社、一九八四年十一月)では、「あつあつのできたて姐ちゃん」という章題⁽⁶⁾をきっかけに、過去の創作活動の遅筆ぶりを語る文章がある。その一部を引用すると、

そうして、私のようなぎりぎりまで書かない者は、しょうがないから先に場面の説明をして、挿画を作っておくのである。これを絵組⁽⁷⁾といって、画家は原稿無しで絵を書くというはめになる。私などはそのときになってもまだでたらめなことをいつている。

あるとき、次号予告に、「片眼片腕片えくぼ」という題名がのった。時代小説で、他ならぬ私がそういったのだから、誰に文句のいいようもないが、これには困った。

夕月⁽⁸⁾とか、晩春⁽⁹⁾とかいうのなら、なんとでもなる。内

容が具体的にあらわれている題名は拘束されてやりにくい。片眼、片腕、片えくぼ、丹下左膳みたいな題名で、丹下左膳にするわけにはいかないのだから困る。

しようがないから、絵組のときも、片眼を斬られる場面、片腕になってしまう場面、そして女と抱き合っている場面を指定した。

まことに無責任だが、とにかく一昼夜で八十枚ばかりの小説を仕上げてしまったのだから、私も若かったのである。

（『喰いたい放題』一五〇頁）

とあり、ここで題名が示されている「片眼片腕片えくぼ」は、『電子全集』で増補された井上志摩夫名義作品のうちに含まれているが、出典は不明であった。そして、『うらおもて人生録』（毎日新聞社、一九八四年一月）の「俺は淀まないぞ——の章」⁽⁷⁾では、色川が二六歳ぐらいで「会社づとめをやめ」たときの出来事が語られている。「知り合いの編集者を頼って、俗にカラーセクションという黄色ページのコントを書かせてもらったり、一枚百円ぐらいの稿料で小型雑誌に時代小説を書いたり」という当時の様子が回想され、娯楽小説の書き手としての意識が述べられる。

そのうちに娯楽小説のコツもいくらかわかってきて、少しずつ注文も増えてくる。なにしろ学校に行かないかわりに、子供るときから映画や寄席ばかり行っていたんだから、普通の人より話芸の教養は積んでるんだね。それに、娯楽小説のポイントは、

俺流に言えば、見知らぬ大勢の人に対する配慮、だと思うからね。これもばくち時代に、客との関係の中できたえてあるんだ。なにしろ、まちがえば財産をすってしまふようなことに人を寄せるんだから、それなりの魅力を備えていないと商売にならないんだよ。

（『うらおもて人生録』一六七―一六八頁）

さらには、娯楽小説の書き手の時期に関する挿話が、つかこうへい『現代文学の無視できない10人 つかこうへいインタビュー』（集英社、一九八九年九月）のインタビュー⁽⁸⁾で語られ、「知り合いの編集者に頼んで、俗にカラーセクションという黄色ページのコントを書かせてもらったり、小さな雑誌に時代小説を書いたりね。博打のあいまに書くんだから妙な気負いがなくて、いいものが書けたよ。現金交換の後腐れのない原稿だからね」（五〇頁）とある。引用部分の前半は『うらおもて人生録』の記述と同様の内容だが、これまでコントの現存は確認されていない。これらの言説を踏まえると、作者は自嘲気味とはいえ、阿佐田哲也以前の変名作品を佳品として語ってきた。

しかし、『昭和文学全集』版の色川武大編「色川武大年譜」（一九七―一〇〇頁）に、「井上志摩夫」の記載はない。追悼特集『別冊・話の特集 色川武大・阿佐田哲也の特集』（第二八三号、一九八九年七月）所収の「色川武大年譜」（二九二―三〇三頁）において「井上志摩夫」が明記され、『全集』版の「色川武大年譜」⁽⁹⁾では、

一九五五年の出来事として、次のように記されている。改稿箇所を――（削除）と（ ）（追加）で示した。

この年をはじめ、桃園書房をていよくクビになる。勉強会の延長で同人誌〈握手〉をやり、夏堀正元、小田三月、細窪孝等を知る。一方、生活費稼ぎに、娯楽雑誌編集者の友人たちを頼り、筆名〔井上志摩夫などといったペンネーム〕で娯楽小説を書く。寺内大吉、早乙女貢、清水正二郎（胡桃沢耕史）、その他大勢の娯楽小説作家を知り、たつぷり五年余、その業界に居るが、ここでも単騎なり。まゆ（以後数年）間の変名作品百本余はあろうが、保存をしないのですべて散逸。痕跡も残らず。

（『全集』四八四頁）

これまで跡づけてきた作者の言説に対し、「変名作品百本余はあろうが、保存をしないのですべて散逸。痕跡も残らず」という記述は、どのように意味づけられるだろうか。従来の研究史において、井上志摩夫名義作品そのものを論じた例は見当たらない。そのため、井上志摩夫に関する言説を辿り、論点を整理したい。

そこで本稿では、井上志摩夫名義作品についての評価史を整理し、「倶楽部雑誌」というメディアについて概観する。次に書誌的調査に基づき、井上志摩夫名義作品に関する既知の情報と照合し、新出作品や特記事項を報告する。また、井上志摩夫「紙の月と描いた雲」と、類似する題名の色川武大「紙の空と描いた月」を比較検討することにより、井上志摩夫名義作品の意義を考察する。最後に、それ

らの分析や考察、今後の課題をまとめたい。

二、評価史の概観

井上志摩夫について最も早く言及した論文として、中谷博「娯楽雑誌の小説を裁断する」〔『自警』第四三巻第八号、一九六一年八月〕があげられる。中谷論文は、当時新刊の娯楽雑誌を例示しながら、それらの掲載作について「読んでいる時は一応面白いが、読後に何の感銘をも残さない。読者が作家と共に考え、共に生活し、共に解決したくなるようなものは、一つも存在しておらない」（三七頁）と概括する。井上志摩夫名義作品の評価は不明だが、ほかの作家、作品と同様に低評価であったことがうかがえる。とはいえ、この時期の「井上志摩夫」については、一部の関係者を除き、色川武大の変名とは知られていなかったことに留意したい。

角川文庫版の阿佐田哲也『麻雀放浪記』（三） 激闘編』（角川書店、一九七九年一〇月）の「解説」で古川凱章は「そのころ、阿佐田さんはさまざまなペンネームを使っていた。娯楽雑誌に時代ものを書くとき、麻雀の戦術を書くとき、そしてイカサマ・ギャンブルの内幕を書くとき、ことごとく違うペンネームを使っていたのだ」（三二頁）と述べている。この「解説」では「井上志摩夫」に触れていないが、塩澤実信『作家の運命を変えた一冊の本』（流動出版、一九八一年一月）の第一章「阿佐田哲也と『麻雀放浪記』」では、

双葉社が「当時、同工異曲の大衆娯楽の読み物雑誌を十数誌出している雑誌社だった。／色川武大が、井上志摩夫のペンネームで発表する剣豪小説の上得意であったし、家族的雰囲気、遊び好きな編集者が多かった」（二三頁）と紹介されている。色川武大論の文脈で「井上志摩夫」という筆名が言及されたことを確認できるが、同社の「大衆娯楽の読み物雑誌」について、

その経営戦略は、社長自らが名づけて「キャラメル戦法」といった。一箱二十粒入ったキャラメルは、一粒一粒同じ形で同じ味だが顧客はよろこんで口に入れる。双葉社で編集される十数誌の大衆読み物雑誌も、このキャラメルと同じで、誌名と表紙の絵が異なるだけで内容はほとんど、同じ顔ぶれの同工異曲の小説ばかり……。それでいて、一冊で数万の部数は捌けていた。トータルすれば、百万部近い売上げがある計算だった。

（『作家の運命を変えた一冊の本』一五頁）

という指摘がある。この文章では、「キャラメル雑誌」（一六頁）という通称を用いているが、雑誌メディアとしての用語は定まっていない。そして、山際素男「また遊びにおいでよ」（『別冊・話の特集 色川武大・阿佐田哲也の特集』所収）に、次のような挿話がある。

僕はその父上が苦手で、怖かった。僕だけでなく訪れる彼の友人はみな恐れていた。彼の留守中勝手に部屋に上りこんでいるのを見つかりこっぴどく怒られたこともある。俺の周りの

人間はみな碌でなしだと思いこんでいるんだ。苦笑しながら、それとなく父上の弁護をした。ある時、父上の部屋をたまたま通り抜けたことがある。もちろん父上は留守だった。ベッドの脇の棚に並んでいる数冊の草双紙風の本が目についた。手にとってみると彼が娯楽雑誌に書いてきた小説を切り抜いて丹念に綴じたものだった。どれも実に丁寧に綴じられていて、表紙までついていた。じんとくるものがあって、それからは父上を余り怖（こ）わがらなくなった気がする。

（『別冊・話の特集 色川武大・阿佐田哲也の特集』一一四頁）

山際は「その頃からすでに彼は、ペンネームこそ違え阿佐田哲也と色川武大の二役を演じていたのだ。ただ無名であっただけだ」（一四頁）と続けている。「その頃」というのは、第六回中央公論新人賞を受賞した一九六一年である。文壇登場以降にも井上志摩夫名義を用いていたように読み取れるが、その時期の発表作は新作なのかという疑問も生じる。

作者生前から追悼特集までの言説をまとめると、井上志摩夫という作家については「娯楽雑誌」に掲載された作家の一人として知られていたものの、色川武大の別名義とみなされるようになるのは、一九七〇年代に色川の知名度が阿佐田哲也という筆名とともに高まっていく時期である。そして、井上志摩夫名義作品そのものは、批評や研究の対象だけでなく、読書の対象としても、掲載雑誌を有する一部の人間が知り得たのだと考えられる。

『傑作時代小説集』は、作者の生前、双葉社の倉庫より発掘され

た井上志摩夫名義作品を収録した全三六編の作品集である。第一巻所収の柳橋史の解説「井上志摩夫の六年間」で、年譜の記述について「いくら若書きとはいえ、「痕跡も残らず」と言い切ったのは、後世への思いも込めたからであろう」(三三〇頁)と推察されている。

出版当時の新聞記事(文化部 富田律之「アウトローに注目集まる——個性を貫く人生に共鳴(ウェーブ)」『日本経済新聞』一九九七年二月七日朝刊、一五面、「日経テレコン」)においては、「有吉一夫氏は「生前から何度も出版を申し出ていたが、若書きなので出版したくないと反対され、ずっと出せずにいた」と打ち明ける」という背景や、「百作品以上ある」とも報じられた。『傑作時代小説集』以外の作品の所在は不明であり、作者における「若書き」の意識が注目されている。

井上隆幸「歴史・時代小説、国内ミステリベスト10」『サンデー毎日』通巻四二二六号、一九九七年二月二日)は、次のように評する。

井上志摩夫が活躍した昭和三十年(一九六二)から三十六年(一九六六)までの六年間は、講談倶楽部・面白倶楽部・小説倶楽部・傑作倶楽部など二十数点あった「倶楽部雑誌」の時代。収録された二十一篇を遡れば、戦前の大佛次郎・吉川英治・長谷川伸らの〈語り〉の匂いがある。死んだものの陳列である正史に総括されない見えざる歴史、衆庶の〈物語〉の匂いがある。

(『サンデー毎日』同号、七四頁)

古川凱章や山際素男が「娯楽雑誌」と称した雑誌について、「倶楽部雑誌」という単語が用いられている。後述するが、日本文学の研究史において一般的な用語とはいいがたい。

坪内祐三は、「色川武大の「空白」期間」(『古くさいぞ私は』晶文社、二〇〇〇年二月、所収)で、井上志摩夫名義作品を高く評価したが、後の「解説」「小さな部屋」の重要性」(『文学界』第五三巻第五号、一九九九年五月)においては、「それらの小説は、あくまで、井上志摩夫名義の読み物小説だった。／それに対してこの「小さな部屋」は色川武大の筆による純文学である」(傍点原文、一九〇頁)と述べた。「読み物小説」に対して「純文学」の優位性を説く価値観は、色川武大「小さな部屋」(第三次『文学生活』第二号、一九五六年九月)を評価するためであろうが、相対的に井上志摩夫名義の価値が低められている。

吉田新一『旅は道づれ——出会った作家たちの肖像』(ワイズ出版、二〇〇一年一〇月)の「焼け跡放浪派・色川武大のもう二つの顔——阿佐田哲也、そして井上志摩夫」に「私が色川武大を初めて知ったのは、いまから四十年近く前であり、双葉社に入社して間もなくのことである。色川が第六回中央公論新人賞を受賞した年の一、二年後に当たる」(九四頁)という記述があり、その時期を次のように回想している。

私が色川に何となく近づけたもう一つの理由は、当時色川が、

色川武大でも阿佐田哲也でもない別の名義・井上志摩夫で、宮本編集長の雑誌に娯楽小説を書いていたからである。入社してしばらくの間、その名義の小説家が色川だと知らなかったから、「あれが、中央公論新人賞の色川武大さんよ」

と、先輩に教えられたとき、正直に言って私は驚くと同時に喜びさえ得たものだ。

（『旅は道づれ——出会った作家たちの肖像』九五頁）

著者の吉田新一の入社が色川武大の中央公論新人賞受賞後だとすれば、文壇登場以降も井上志摩夫名義で作家活動をしていたことになる。これらのように、『傑作時代小説集』の出版以降も、井上志摩夫に関する言説は重ねられてきた。

『KAWADE夢ムック 文藝別冊 「総特集」 色川武大vs阿佐田哲也』（河出書房新社、二〇〇三年一〇月、以下『文藝別冊 「総特集」』により、井上志摩夫「天和をつくれ」が共栄社の雑誌『オール読切』一九五九年三月号に掲載されていることが紹介されている。

井上志摩夫名義作品には、時代小説だけでなく麻雀小説のあることも明らかにしたが、『文藝別冊 「総特集」』「色川武大・阿佐田哲也・井上志摩夫 全著作レヴュー」において、井上志摩夫名義の文章が石塚喜章編『なぜ勝てないのか——競輪・競馬・麻雀がイヤになる本——』（日本文芸社、一九六七年七月）に収録されていることが紹介された。それにより、井上志摩夫名義の最後の発表年が、一九六七年ということも知られるようになった。

結城信孝「解説」（『昭和の短篇一人一冊集成 色川武大』未知谷、二〇〇八年一〇月）によれば、既知の井上志摩夫名義作品について、「これらを「すべて散逸」としたのは作者の記憶がいか、あるいはその存在自体を抹殺したかったのか」（二九七頁）と問うたうえで、次のように評した。

作品を通読した感想をいえば時代小説群は、のちに阿佐田名義で発表された『次郎長放浪記』（角川文庫）や、色川名義の『虫けら太平記』（文春文庫）と比較しても見劣りするものではなく、「天和をつくれ」も『麻雀放浪記』（角川文庫、文春文庫）の世界に通じる迫力にみちいて、これまで単行本化されなかったのが不思議なほどの名篇だった。（二九七頁）

井上志摩夫に関する従来の言説は、双葉社の関係者や、解説や書評、解題を中心に形成されてきた。そのため、作品の評価は好意的で、内容については仄めかす程度にとどまる。

拙稿「『怪しい来客簿』の成立過程——色川武大をめぐる「最後の無頼派」の源流——」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六四輯、二〇一九年三月、一七九―一九五頁）で杉民也名義作品「寝心地よいアスファルト——小説・ドヤ街の子供たち——」を紹介した。『怪しい来客簿』の「とんがれ とんがり とんがる」に発展していくことを指摘したが、その掲載誌『小説倶楽部』（臨時増刊、第一一巻第一二号、一九五八年一〇月）は後述する「倶楽部雑誌」に位置づけられるものの、その発表媒体の分析には至っていない。

『電子全集』第一六卷は「井上志摩夫」作品群「人斬り」「切腹」ほか」という副題で、『傑作時代小説集』全三六編に、一関市博物館所蔵の作者の遺品（スクラップブック）から二一編を加えた全五七編の井上志摩夫名義作品が収録されている。大槻慎二は『電子全集』第一六卷の「解題」^①で、次のように述べている。

なお、今回この巻で初めて公開されるのは井上志摩夫名義の現代小説であるが、前述したように完成度という点では見劣りがするものの、これらの作品が書かれた昭和三十年代の風俗、つまり色川武大が作家として立とうとしていた時代の様子が生き生きと描かれている点に注目したい。それに何よりも、後年主として阿佐田哲也名義で書かれた軽いタッチの作品群の語り口、人物造形の巧みさやプロットの立て方などの源がここにある、ブラッシュアップされていない分、逆に骨組みがよくわかって興味が尽きないのである。

前述の「片眼片腕片えくぼ」や柳橋史が言及していた「乾盃！シンデレラ」の現存は、大槻慎二「解題」では指摘されていないが、非常に貴重な発見だといえる。しかし、「完成度という点では見劣りがする」という評価や「ブラッシュアップされていない」という指摘などは、後年の作品に対する習作的な位置づけである。

前掲の古川凱章や山際素男が「娯楽雑誌」と称していた「倶楽部雑誌」について、『大衆文化事典』（弘文堂、一九九一年二月）で立項されているとはいえ、『日本近代文学大事典』増補改訂デジタル

版の項目「大衆雑誌」^⑫によれば、「昭和二三年五月創刊の『日本小説』が中間小説雑誌の先鞭をつけたが、『小説新潮』『オール読物』『小説現代』が、いわゆる中間小説雑誌の御三家として、新しい大衆雑誌の本道を歩んでいる。このかげで、『倶楽部雑誌』の衰微となつたが、これはテレビの低俗番組に席をゆずったことになろうか」とあり、「倶楽部雑誌」という単語はみられるものの、増補改訂後でも「倶楽部雑誌」は立項されていない。塩澤実信『倶楽部雑誌探究——出版人に聞く^⑬』（論創社、二〇一四年三月）は、小田光雄がインタビュ・構成を務め「倶楽部雑誌」について検討した文献である。小田は、山本明『カストリ雑誌研究——シンボルにみる風俗史』（出版ニュース社、一九七六年七月）や福島鏗郎『雑誌で見る戦後史』（大月書店、一九八七年四月）などの書名をあげながら、「倶楽部雑誌」を収集してきた経緯を塩澤に伝え、次のような会話を交わしている。

—— 本当はもっと量を集め、それらにある程度読破した上で検証するのがベストなんでしょうが、ちよつとそこまで根気がなく、それぞれのタイトルをピックアップし、概観することしかできない。それが残念なのですが。

塩澤 それは徒勞でしかないし、そこまで深く考えないほうがいい。当事者の僕がいうわけだから、まず間違いはない。極端にいつてしまえば、出版社も刊行したことを忘れ、作家や編集者だって書いたことも編集したことも忘れていくくらいで、

もうひとつ加えれば、読者だって読んだことなど記憶に残っていないというない尽くしの世界、それが倶楽部雑誌の実態と意味だといっても過言ではないでしょう。

『倶楽部雑誌探究——出版人に聞く^⑬』一二六—一二七頁

小田は「最初で最後の倶楽部小説論となるかもしれませんので」(一二七頁)と断りながらもインタビュを続けていくのだが、塩澤は「発表が倶楽部雑誌の若書さといえ、これだけの量の助走があつて、後年の色川武大と阿佐田哲也が生まれたのだと判断しています」(一二二頁)とも指摘している。だが、「倶楽部雑誌」に関する研究はカストリ雑誌研究の現状^⑬に比べ、進展はみられない。

色川武大における変名作品の諸問題は、作者の「若書き」という自意識、そして「倶楽部雑誌」というメディアに関する調査の不備である。『傑作時代小説集』収録作の書誌情報の一部は「不明」や「再録、初出不明」とあり、『電子全集』で増補された作品群も、底本がスクラップブックのためか、書誌情報は全て「初出誌、掲載月日等不明」とされている。しかし、作者や作者の実父のような「倶楽部雑誌」の読者が、その掲載作品を保存しようと努めたことよって、今日に至るまで現存したことは確かである。そのような資料の調査は、日本の大衆文学史を検討していくうえで重要と思われる。そのため、個別の作品分析の前提として、井上志摩夫名義作品の出版について調査したい。

三、国立国会図書館所蔵資料

「井上志摩夫」小説について

国立国会図書館ウェブサイトの「国立国会図書館デジタルコレクション」の検索機能において、キーワード「井上志摩夫」で検索すると、次の雑誌に井上志摩夫名義作品が掲載されている。^⑭『小説倶楽部』(桃園書房)には、「縛り首平吉」(臨時増刊第十二巻第五号、一九五九年三月)、「純潔の履歴書」(臨時増刊第十二巻第八号、一九五九年五月)、「切腹教科書」(臨時増刊第十二巻第一六号、一九五九年一月)の三編、『中学二年コース』(学習研究社)には、「赤いグローブ——大毎オリオンズ葛城隆雄選手」(第三巻第七号、一九五九年一〇月)、「うなれ弾丸ライナー——巨人坂崎選手」(第三巻第八号、一九五九年十一月)の二編、『ベースボール・マガジン』(ベースボール・マガジン社)には、「甲子園の土」(第二巻第一号、一九五九年一月)、「泣くな井崎」(第二巻第三号、一九五九年三月)、「この母とともに!」(第二巻第四号、一九五九年四月)、「伝統の灯は消えず 藤村富美男と若虎たち」(第二巻第五号、一九五九年五月)、「黄金の左腕(金田正一物語)」(第二巻第六号、一九五九年六月)、「偉大なる勝負師 その名は水原円裕」(第二巻第六号、一九五九年六月)の六編が見出せる。

これらは『傑作時代小説集』未収録で、「縛り首平吉」「純血の履

歴書」「切腹教科書」の三編が『電子全集』で増補された作品群に含まれる。年譜によれば、一九五五年まで色川は桃園書房に編集者として在籍していたとされるため、作品発表の経緯は「娯楽雑誌編集者の友人たちを頼りに」という記述に根拠を求められるだろう。つまり、『傑作時代小説集』と『電子全集』収録作のほかに、これまで知られていなかった井上志摩夫名義作品が現存する可能性を示している。

本稿は、国立国会図書館の所蔵資料より、一九六〇年代までに創刊された双葉社の雑誌を調査対象とする。一九七〇年代までに休刊になった雑誌資料は全号を、一九八〇年代以降も刊行された資料は一九七〇年までを調査範囲とし、報告対象は小説作品とした。⁽¹⁵⁾資料は五十音順に列挙し、『傑作時代小説集』および『電子全集』での未収録作品は、新出作品を意味する「新」を付し、臨時増刊号の雑誌は、発行年月日まで注記した。

調査結果を雑誌ごとにまとめると、『傑作倶楽部』全九編（新出、三編）⁽¹⁶⁾、『剣豪列伝集』全四編（新出、一編）⁽¹⁷⁾、『小説の泉』全五編（新出、一編）⁽¹⁸⁾、『大衆小説』全一四編（新出、三編）⁽¹⁹⁾、『別冊読切傑作集』全一編（新出、なし）⁽²⁰⁾、『別冊読切雑誌』全二編（新出、なし）⁽²¹⁾、『読切傑作集』全三編（新出、二編）⁽²²⁾、『読切雑誌』全六編（新出、二編）⁽²³⁾、『読切時代小説』全五編（新出、二編）⁽²⁴⁾、『読切特撰集』全二編（新出、一編）⁽²⁵⁾であった。このように、国立国会図書館所蔵資料の双葉社の雑誌を調査した結果、述べ五一編の井上志摩夫名義の小説作品

を特定し、さらに一五編の新出作品を確認できた。そのうち、『傑作時代小説集』の書誌情報に合致したものは三編（「吉原百人斬り」「血と剣」とうふい）、書誌情報「不明」の四編（「鬼っ子彦六」「海道一の流れ星」「命が惜しゅうござる」「和泉屋次郎吉」）について、その出典を特定できた。既出の情報と一致しないものは、どちらかが再録だと考えられる。

新出作品に位置づけた「縛り首平吉」「純潔の履歴書」「切腹教科書」の三編は、前掲三誌（『小説倶楽部』『中学二年コース』『ベール・マジン』）掲載作と同じ題名の作品に数えられる。双葉社の雑誌の掲載作は再録だと考えられるが、本文の異同がみられるため、同一作品とみなせるかは、保留せざるを得ない。『電子全集』で増補された二一編のうち、一六編の題名の出典を特定できたものの、本文の具体的な検討は今後の課題であり、五編（「尻振り侍」「氷雨に住む獣」「立川発23時55分」「乾盃！ シンデレラ」「練艦エレジー」）については確認できず、継続的な調査を要する。

特筆すべきものとして、「片眼片腕片えくぼ」は題名のみ『喰いたい放題』で伝えられ、『電子全集』で増補された作品であったが、その出典が『小説の泉』で、挿絵の作者が利根風太郎であることも判明した。

『傑作時代小説集』所収の一編「人斬り包丁」の初出は『大衆小説』昭和35年5月号とされていた。そのため、本調査結果の「人斬り庖丁」（『傑作倶楽部』所収）は再録と考えられ、本文の異同の

確認を要するが、同号の「編集室」では次のように述べられている。

★本号は、精選した時代小説を特に読んでいただきたい、と思います。巻頭の井上先生の異色作「人斬り庖丁」は、百枚に及ぶ力作です。全国で大流行の流感にもめげず、筆を揮っていた作品です。そのほかの作品いずれも、ご期待に十分お応えできる佳作ばかりです。より一層のご愛読をお願いします。

（「編集室」「傑作倶楽部」同号、三〇八頁）

引用箇所「全国で大流行の流感にもめげず」とあり、新作として扱われている。従来通説では、一九五五年から六一年までの六年間が「井上志摩夫時代」であり、一九六一年の文壇登場から「阿佐田哲也」使用開始の六八年まで、色川は変名での創作活動を「廃業」や「自粛」していたとされる。この期間の『傑作時代小説集』収録作は「巷説天保六花撰」を例外に「再録」と記載されていた。実状は定かでないが、井上志摩夫という作家と作品は、双葉社の雑誌において、一九六八年まで活躍していたのである。

四、「紙の月と描いた雲」と「紙の空と描いた月」

井上志摩夫「紙の月と描いた雲」は、『電子全集』第一六巻で「初出誌、掲載月日等不明」として増補された『傑作時代小説集』未収録作品である。本調査によって、『読切時代小説』（臨時増刊、第五卷第六号、一九六四年六月一日）が出典の一つだと確認できた。

概要は次のようにまとめられるだろう。

敗戦後の日本を舞台に、駒木根由美という人物が元職業軍人の父親に反抗し、「不良少女めいた行動」をとるようになる。それが原因で警察に補導されたことの罪悪感がつきまとい、学校を中退し、会社へ就職しても、そのときの出来事が周囲へ露見することの不安が消えず、社員の岡戸信博と不倫関係になっても、常に駒木根由美を消極的にさせる。

題名の「紙の月と描いた雲」は、ビリー・ロウズ、E・Y・ハーバーク作詞、ハロルド・アーレン作曲のジャズソング「It's only a paper moon」の関連を推察させる。同時代の日本に典拠を求めれば、新興楽譜編集部編『新興スタンダード・ジャズ・ソング・ピアノ伴奏・訳詞付 vol. 1』（新興楽譜出版社、一九五八年）に楽譜として収録されているため、一般にも親しまれ、あるいは演奏された楽曲であったことが推定できる。作中では、駒木根由美の歌を聞いた岡戸信博が「紙の月に、描いた雲、か」と「つぶやく」ことにより、駒木根由美の性格が虚構だという印象を強めている。後に色川は『唄えば天国ジャズソング 命から二番目に大事な歌』（ミュージック・マガジン、一九八七年五月）の「ジーズ・フリーリッシュ・シンクス」において「イツ・オンリィ・ア・ペイパー・ムーン」（一六八頁）へ言及しているので、作者にとっても馴染み深い楽曲であったと考えられる。

元職業軍人の父と不良の子という対立関係は、色川の私小説的作

品で繰り返し描かれるモチーフである。また、家庭や学校での「劣等感」が「不良」になる過程や、「前科者」の自意識と向き合う場面は、文壇登場作「黒い布」では描かれていない。しかし、色川作品の系譜を辿ると、「黒い布」から「連笑」(『新潮』第七六巻第七号、一九七九年七月)までの連続性を見出せる場面がある。

その頃はもう物資が窮乏しはじめていた。食事の量も減り、食物の種類も限られてきた。何か珍らしいものが食膳にあがるたびに草弥はひと箸も手をつけなかった。そうでないときは自分の食事を半分ほど別の皿に取って、好吉の方に押しやるのだった。

「おさがり——」

そういうときの草弥の声は極めて優しくかった。しかし、いつの頃からか、好吉はそうされるとその皿に手をつけないようになった。いくらすすめられても首を振るだけである。理由は決して云わない。草弥は癪を立てた。

「人の好意を、無にしやがる」

(色川武大「黒い布」)

息子の好吉は自分の行為についての「理由は決して云わない」ため、真意は不明である。伊藤整・武田泰淳・三島由紀夫「第六回中央公論新人賞選考座談会」⁽²⁶⁾において、「それにしても、息子は書きたくないな」(三二九頁)と武田泰淳に指摘されている。その一方で、「紙の月と描いた雲」では、娘としての駒木根由美の心情が詳しく

語られる。

食事のときなど、おいしいお菜があると、父親は自分の分を食わずに子供たちに分け与える。それはいいが、子供たちが喜んで食べないと怒る。実に勝手だ、善意の無理押しつけど。自分たちは奴隷ではない、と由美は思うのである。由美だけは父親にどんなにすすめられても、それに箸をつけない。それどころか、小遣いも、洋服も、母親の方にねだって、父からの配慮はすべて拒絶する。父親の頑固さに対抗するには、自分も意固地にてつすることだ、と思っていた。

(井上志摩夫「紙の月と描いた雲」)

引用箇所のような「父からの配慮はすべて拒絶する」ことの心情の吐露は「黒い布」とは対照的であり、子が「不良」の道へと進む理由が、明瞭に描かれている。さらに「連笑」を並べると、父親への反抗心は語り手の「私」の心情のように語られている。

彼は、息子の喰べぶりを細かく観察しており、自分は汁と飯を主にして喰べはじめ、けっして最初からおかずの皿に手をつけない。私がそのおかずを気にいったとみると、

「おさがり——」

(中略)

私は、保護を受け、それに甘んじていなければならない自分が口惜しくてならなかったけれど、実際は保護を受けているより仕方がない。だからなおさら腹が立った。

父親の態度は、将校が兵隊を、人間が犬を、慈しむ類のものだと、その頃は受けとっていた。

（色川武大「連笑」）

『全集』第一巻「解題」において村松友視は「職を転々と変え、麻薬の巻き添えで警察に呼ばれ、博打場を遊びあるく息子……それこそが色川武大その人なのだが、たしかにそこだけが何となくふつうになってしまっているのだ。その「息子」の目から見た世界が、『怪しい来客簿』では活々として描写されている」（三八八頁）と指摘している。色川の私小説的作品における〈父子もの〉の系譜が、娯楽小説としての井上志摩夫名義作品に見出せるのは重要である。「黒い布」の一場面が後年の「連笑」でより緻密に描かれることで「紙の月と描いた雲」の役割は終えたように考えられる。

しかし、類似の題名の作品として本名名義で改作されることによつて、生前は「若書き」として「散逸」扱ひしたかったとしても、後に再発見されるのを期待したのではないかと思われる作品が「紙の空と描いた月」である。

色川武大「紙の空と描いた月」は、一九八三年一〇月『別冊婦人公論』（一四号、一一六―一二五頁）掲載の短編小説である。作者生前は単行本未収録で、『全集』第四巻「短編小説Ⅲ」に収録された。高橋昌男「解題」（『全集』第四巻）によれば、「話がそれだけで完結する短篇は書き手の〈芸〉の見せどころで、色川さんの場合も起伏に富んだ筋の運びといい巧みなセリフ回しといい、ストーリー・

テラーの才を存分に發揮して期待を裏切らない」（三五二頁）としたうえで、次のように分類されている。

人生の哀歓を描くという月並みだが、彼が好んで取り上げるのは、社会の片隅で懸命に生きる名もない人々で、そういう人たちにそそぐ優しいまなざしが小説の基調をなしている。本当は三十になろうという、公称二十六歳の歌手若草すみれの、大スターゆえに取り逃がす恋を描いた「紙の空と描いた月」、ストリップ小屋の雑用係ボーが、観客に頭を殴らせることだけをもち芸にして名を売ろうとする「赤い靴」を仮に芸人ものと名付けるとすれば、「一念放棄」と「おつちよこちよい」は酒場の女ものと呼べるだろう。（三五二頁）

類似する題名の二作品の共通点は駒木根由美という登場人物の名前のみで、そのほかの設定や展開は全く異なる。井上志摩夫「紙の月と描いた雲」の題名が、作中のジャズ小唄に由来するのだとすれば、「紙の空と描いた月」への〈芸人もの〉という分類は、二村定一について描いた「砂漠に陽が落ちて」（『怪しい来客簿』）の系譜に並べられるだろう。前掲の「ふくちゃんれでい」でも同様の内容で語られるが、歌手という職業の「全能感」について、次のような会話が行われる。

「全能感というのかな、ナポレオンだって、こんなに手軽に味わえなかったようなものを、こともなげに毎日味わえるんだからなア。すごい職業だね。一度やったらもうやめられないだろ

う」

「もう慣れちゃったけど、そうかもしれないわね——」

と彼女はいった。

「でも、ナポレオンとはちがうわよ。泥絵具で描いた空に、紙の月がかかっているだけ」

（色川武大「紙の空と描いた月」）

色川作品を参照すると、平野愛子（『横浜、月夜、高速道路』『街は気まぐれへソ magari』徳間書店、一九八七年十一月、九二頁）や美空ひばり「戦後史グラフィティ」色川武大・長部日出雄・村松友視・絵Ⅱ和田誠（『戦後史グラフィティ』話の特集、一九八九年八月、二六頁）について述べたものに類似の表現が見出せる。引用本文では「描いた空に、紙の月」とあり、題名と一致しない点に読みどころが見出せるだろう。すなわち、若草すみれという芸名と駒木根由美という本名との齟齬である。

「いや。——でも君は同時に普通の娘さんでもあるわけだろう。神さまのような全能感を当然みたいに受けとっている偉い人から、ごく普通の娘に、どこで戻るんだろう」

「どいど、っどど」

「たとえば、本名の生活と芸名の生活があるね。どこで切りかわるの。今、ぼくと向かいあっている娘さんは、神さまの顔つきとちがうようだが、どこで神さまじゃなくなるんだろう」

（色川武大「紙の空と描いた月」）

「普通の娘」に「戻る」という表現から連想されるのは、一九七三年から七八年にかけて活躍したキャンディーズによる「普通の女の子になりたい」という流行語である。⁽²⁷⁾ 引用箇所「本名の生活と芸名の生活」とは、駒木根由美と若草すみれとの生活が「どこで切りかわる」ということに対する疑問だが、この時期の色川武大の作家活動に照らし合わせれば、「麻雀放浪記」シリーズが完結し、直木賞を受賞した年である。色川武大と阿佐田哲也との「一人二役」の生活と重なるような問いや、「神さまじゃなくなる」という会話からは、「麻雀の神さま」⁽²⁹⁾として偶像になった現状の心情の吐露だと読むことができるだろう。

井上志摩夫「紙の月と描いた雲」から色川武大「紙の空と描いた月」との比較を通して、二点の指摘ができる。まず、倶楽部雑誌への発表作に、〈父子もの〉の心境がより具体的に表現されていること。そして、駒木根由美という登場人物の心理的な葛藤が「劣等感」から「全能感」へ変化したことで、「麻雀の神さま」と称賛された阿佐田哲也の「虚名」を抱え込んだ作者色川武大の作家活動後期の主題が表現されているのである。

五、おわりに

本稿では、色川武大の変名作品をめぐって井上志摩夫名義作品の書誌的な調査を行った。それらの分析と考察、今後の課題をまとめ

たい。

従来、色川が井上志摩夫名義で作品を発表していた「井上志摩夫時代」とは、一九五五年から六一年までの約六年間とみなされていた。しかし、一九六一年以降の掲載作品も新作のように扱われ、その後の一九六七年（一九六八年発行の雑誌）に至る約七年間についても、「井上志摩夫時代」に含められることが確認できた。⁽³⁰⁾ 色川にとって「井上志摩夫」とは、無名作家時代の中心的筆名だったのであろう。色川の作家活動は、一九六八年における「井上志摩夫」から「阿佐田哲也」への変名の移行に転機が見出せる。さらにいえば、一九五〇年代から一九六八年までの「井上志摩夫時代」こそが、色川武大の作家活動前期として位置づけられるのではないだろうか。

このような視点をもたらすのが、井上志摩夫「紙の月と描いた雲」と色川武大「紙の空と描いた月」である。これらは、既成の日本文学史はもとより、色川武大という一人の作家においても、重要視されてこなかった作品である。しかし、「純文学」の作家色川武大^{いらかぶだい}として文壇的評価を獲得した作者が、「紙の月と描いた雲」を井上志摩夫名義で「倶楽部雑誌」へ発表したことは重要であろう。元職業軍人の父親との心理的な対立、学校での「劣等感」を抱いて「不良」になる過程、そして「前科者」の自覚を描いた作品「紙の月と描いた雲」の出版が「黒い布」より前に遡れるかは、現時点で不明である。とはいえ、「純文学」として歓迎された（父子もの）の題材が「娯楽小説」の読者も対象に書かれたとすれば、「倶楽部雑誌」へ掲載

された井上志摩夫名義作品を読むことは、「純文学」や「娯楽小説」（大衆文学）といったジャンルを超えた言語表現としての価値を明らかにすることになる。

「紙の月と描いた雲」から「紙の空と描いた月」への改作と、その作風の変化は、（父子もの）の「黒い布」で「無名の作家」から「純文学」の作家としてデビューした色川武大が、「麻雀の神さま」へ、さらに直木賞作家へと変貌する過程を読むことができる。駒木根由美という同名の登場人物を類似する題名で改作したことにより、色川武大の作家活動後期における葛藤を描いた作品として浮かび上がらせた意義は大きい。色川武大「紙の空と描いた月」から井上志摩夫「紙の月と描いた雲」への経路のような情報を作者が自ら示したということは、当時の出版関係者の塩澤が「ないない尽くしの世界」と塩澤が語る「倶楽部雑誌」研究の不毛さでなく、後世の読者が「倶楽部雑誌」を読むことへの期待が込められているのではないか。

最後に、『傑作時代小説集』と『電子全集』の収録作のうち、既知の書誌情報と本調査の結果とでは、同一の題名の作品でも発表媒体の異なる例も確認できたため、同一の作品とは判断しがたい。そして、井上志摩夫名義の第一作、「麻雀の神さま」という呼称の活字上の初出、色川武大名義への「仕立て直し」が知られる「名無しの恋兵衛」⁽³¹⁾の読解等、調査課題は少なくない。色川武大における変名作品は、日本の大衆文学史を跡付けるものとして、重要な研究対象なのである。

注

- (1) 川村二郎「色川武大・人と作品」(小学館版『昭和文学全集』第三二巻) 参照。
- (2) 初出『週刊大衆』全九回(五四四号、一〇月三日～五五二号、一一月二八日)。
- (3) 初出『小説現代』(第一六巻第一〇号、一九七八年一〇月)。引用は、単行本版。
- (4) 初出『週刊小説』(三三九号、一九八〇年二月二三日)。
- (5) 柳橋史「井上志摩夫の六年間」(『傑作時代小説集』第一巻) 参照。
- (6) 初出『潮』(二九六号、一九八三年二月)。引用は、単行本版。
- (7) 初出『毎日新聞』全五五回(一九八三年八月七日～八四年八月二六日)。引用は、単行本版。
- (8) 初出『すばる』第八巻第二号、一九八六年二月。引用は集英社文庫版。
- (9) 『全集』第一六巻所収。「自筆年譜に依る」という但し書きが付されているものの、自筆年譜の現存は未詳。
- (10) 『オール読切』(第一一巻第四号、一九五九年三月、架蔵本) 参照。
- (11) 『小学館eBooks』色川武大・阿佐田哲也 電子全集 16「井上志摩夫」作品群「人斬り」「切腹」ほか(小学館、二〇二〇年七月、ebookhonto)。
- (12) JapanKnowledge. <https://japanknowledge.com.waseda.idm.oclc.org>. (最終閲覧:二〇二四年八月二日) 項目執筆者は和田佳恵(一九七七年記)。
- (13) The Museum of Modern Japanese Literature
(© The Museum of Modern Japanese Literature)
石川巧編集代表・カストリ雑誌編集委員会編『戦後出版文化史のなかのカストリ雑誌』(勉誠社、二〇二四年六月)
- (14) 「国立国会図書館デジタルコレクション」(最終閲覧:二〇二四年八月二日)
<https://dlndi.go.jp/search/searchResult?pageNum=0&pageSize=20&sortKey=SCORE&fullText=true&includeVolumeNum=true&keyword=%E4>

%BA%95%E4%B8%8A%E5%BF%97%E6%91%A9%E5%A4%AB&displayMode=isi&accessRestrictions=internet&accessRestrictions=oc&accessRestrictions=inlibrary

作品名は、五十音順で掲出。

- (15) 井上志摩夫「神楽坂」(『大衆小説』第五巻第一四号、一九五九年一〇月、架蔵本) のように、「小説」以外の作品も存在するため。
- (16) 新 一九六〇年 九月 「野郎の唄」(第一〇巻第九号)
新 一九六一年 七月 「ラーメン群盗伝」(第一一巻第九号)
新 一九六一年 一月 「わかりません」(第一一巻第一四号)
一九六二年 三月 「純潔の履歴書」(第一二巻第四号)
一九六二年 八月 一五日 「暁の鐘が鳴る」(第一二巻第一一号)
一九六四年 六月 「和泉屋次郎吉」(第一四巻第七号)
一九六四年 七月 「抱き寝の鴉」(第一四巻第八号)
一九六四年 八月 「邪ン剣武士」(第一四巻第九号)
一九六五年 五月 「人切り庖丁」(第一五巻第五号)
(17) 新 一九五七年 二月 「大高源吾」(第一巻第八号)
一九六一年 七月 「海道一の流れ星」(第五巻第九号)
一九六四年 四月 「美男桜」(第八巻第五号)
一九六四年 五月 「酔いどれ剣士」(第八巻第六号)
一九六一年 六月 「片眼片腕片えくぼ」(第九巻第七号)
一九六一年 一〇月 「竹と水仙」(第九巻第一三号)
(18) 一九六三年 二月 一五日 「稲妻駕籠」(第一一巻第三号)
一九六三年 三月 「トリオムコサンス」(第一一巻第四号)
新 一九六三年 二月 「天高からず物語」(第一一巻第一四号)
新 一九六〇年 九月 「百円しかない」(第六巻第一一号)
一九六一年 五月 「東京に殴り込め」(第七巻第六号)
一九六二年 八月 一五日 「拳銃を射つまで」(第八巻第一一号)
一九六四年 一月 「名無しの恋兵衛」(第一〇巻第一号)

(25)	新	一九六一年 七月	「温泉芸者」(第九卷第八号)
(24)	新	一九六二年 二月	「切腹教科書」(第三卷第三号)
	新	一九六四年 一月二十五日	「蟻ときりぎりす」(第五卷第二号)
	新	一九六四年 四月十五日	「紙の月と描いた雲」(第五卷第六号)
	新	一九六七年 七月十五日	「凶状狂い」(第八卷第一〇号)
	新	一九六一年 八月	「首桶仁義」(第二卷第八号)
	新	一九六七年一〇月	「疫病神太平記」(第一八卷第一〇号)
	新	一九六六年一二月	「血と剣」(第一七卷第一二号)
	新	一九六四年 五月	「縛り首平吉」(第一五卷第五号)
	新	一九六三年 一月	「燃えて夜空に」(第一四卷第一号)
(23)	新	一九六一年一二月	「崖下の神様」(第二二卷第一二号)
	新	一九六一年 二月	「暁の鐘が鳴る」(第一二卷第二号)
	新	一九六四年 四月	「俺は風の子」(第一七卷第四号)
(22)	新	一九六一年 一月	「剣豪買います」(第一四卷第一号)
	新	一九五七年一〇月	「しら浪月夜」(第一〇卷第一二号)
(21)	新	一九六四年一二月	「虫けら直次郎」(第八卷第六号)
(20)	新	一九六四年 八月	「とうふい」(第八卷第四号)
	新	一九六〇年 九月 一日	「吉原百人斬り」(第七〇集)
	新	一九六七年 五月	「鬼っ子彦六」(第一三卷第五号)
	新	一九六六年一二月	「悲運な星」(第一二卷第一二号)
	新	一九六四年 八月	「今晚わ幽霊です」(第一〇卷第一一号)
	新	一九六四年 七月	「命が一つ星三つ」(第一〇卷第九号)
	新	一九六四年 六月	「三文オペラ」(第一〇卷第八号)
	新	一九六四年 五月	「江戸の休日」(第一〇卷第七号)
	新	一九六四年 四月	「桃色木馬」(第一〇卷第五号)
	新	一九六四年 三月	「押しくらまんじゅう」(第一〇卷第四号)
	新	一九六四年 二月	「逃げるや逃げる」(第一〇卷第三号)
	新	一九六四年 一月二十五日	「命が惜しゅうござる」(第一〇卷第二号)

- (1968年 一月) 「名無しの恋兵衛」(第一六卷第一号)
- (26) 「中央公論」(第七六卷第一一号、一九六一年一月、三二二〜三二九頁)。
- (27) 「(2) 普通の女の子になりたい シンデレラの夢薄れ 流行語77」
- 『朝日新聞』一九七七年二月一四日夕刊、九面、「朝日新聞クロスサーチ」
- (28) 「二人二役」は「色川武大年譜」(『昭和文学全集』)の一九七九年の記述による。
- (29) 「練馬の冷やしワシントン」(『喰いたい放題』一一頁) 参照。
- (30) 「なぜ勝てないのか」のように、一九六七年を「井上志摩夫時代」に含める資料は存在していたが、本稿における「倶楽部雑誌」への問題意識とは論点が異なる。
- (31) 注(5)に同じ。

【付記】

本文の引用に際し、旧字体は新字体に改め、適宜、ルビは省略した。